三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと再生ネットワーク
〒100-1101
東京都三宅島三宅村神着320-2
TEL 090-4922-0798
発行人：会長 佐藤就之

会長時評

復興に向けた様々な動き

健康講座定期的に実施

今回の会長時評では、第９回世話人会の内容報告、埼玉県立大の及川裕子先生などによる健康講座の状況報告、「モーターフェスタ」の開催情報などを掲載した。

伊豆地区での健康講座

懇親会17日に開催

第３回目の「在京ふれあい懇親会」の開催などを決めた第９回世話人会は、９月25日飯田橋で開かれた。

会議は酒井・大坊副会長など11人が出席し阪神神戸研修、フジＴＶの放映など６項目の活動報告を伊藤奈穂子事務局長が行い、今後の活動方針を佐藤会長が提案し次の通り決定した。

◎第３回在京ふれあい懇親会に参加を！

日時　11月17日（土）11時～13時半

会費　３０００円（在京者は１０００円）

場所　地蔵そば大橋屋（巣鴨駅下車地蔵通りとげぬき地蔵尊並び）

◎高濃度地区対策、被災者生活支援法要望書提出などの決定。

骨粗しょう症予防のフラミンゴ体操

及川先生等が来島

埼玉県立大学の及川裕子先生、神戸の黒田裕子ＮＰＯ法人理事長（本紙11号紹介）など７人が８月18日に来島し、神着老人クラブの健康講座、坪田と神着自治会長、村役場などとの地域防災聞き取り調査、社協、風の家の上原氏との懇談。また在島ネット協力者との懇親会も行い「三宅島災害支援ネットワーク」を組織し大学教授などが在京者訪問、島内で健康巡回講座などをしてくださることになった。

第２回目として10月４、５日に神着、坪田、伊豆地区で健康講座を、及川裕子、片岡優華両先生が開催。延べ67人が参加した。次回は１月を予定している。

モーターフェスタ結果の評価を

復興への足がかりとなることが期待される「モーターフェスタ」、16日から３日間開催。

同時期に噴火した有珠山は来春に洞爺湖サミット開催、今年11月19日の「第５回火山都市国際会議島原大会」とは比較にならないが、結果によっては見直しが必要だ。

都には、勤福会館のボーリング場再開、児童公園（通称）整備など、忘れずに早期着工を要望したい。（ふるさとネット会長　佐藤就之）

事務局便り

○第10回世話人会開催
11月17日（土）午後２時から。在京ふれあい懇親会終了後巣鴨駅周辺にて。詳細は追って連絡致します。在京島民の方々のご参加も大歓迎です！

○ご寄付のお願い
ご協力ありがとうございます。一人でも多くの方に被災地の現状を伝え、皆様と考えていきたいと思います。これからも宜しくお願い致します。

郵便振替口座
口座番号：00120-3-545036
口座名称：三宅島ふるさと再生ネットワーク
事務局：あすなろ保育園内
住所：〒173-0005
東京都板橋区仲宿25-6

大妻女子大学人間関係学部　干川剛史教授

復興に必要な若い力

大妻女子大学人間関係学部干川剛史教授に、これまでの三宅島の復興支援に関する取り組みや今後の課題について伺った。現在「都市再生モデル事業」に採択されたＮＰＯの活動などが行われているが、先生は、今後はこのような事業を進める若い力が必要になることを指摘した。

都市再生モデル事業に

島の現状を「何とかしたい」と考え生活や経済の復興などに取り組んでいる三宅島の人たちの手助けをするために、島外の支援者が、昨年から、行政の支援を受けながら、三宅島の復興支援プロジェクトを開始しています。

そこで、首相官邸「都市再生本部」の平成18年度『都市再生モデル調査事業』「三宅島の火山等の現状を活かした地震・火山、危機管理、防災まちづくり等の学習拠点としての観光立島」が、ＮＰＯ法人「海洋研修センター」によって構想・企画され、三宅村の推薦の下に、首相官邸「都市再生本部」に申請して採択され、三宅島の観光協会・商工会・漁協・農協等と連携して実施されました。

多くのプラン実践

実施された内容は以下のものです。

①大型ヨットによる横浜～三宅島間のクルージング調査モデルツアー

②島内調査及び島民ヒアリングの実施

③ワークショップ（ミニフォーラム）の開催

このモデル調査事業の目的は、過去４回にわたる噴火経験の語り手を見つけることなどにより、三宅島を企業や自治体の危機管理者の研修の場にして、研修者が年間を通じて来島するようにして、観光業を中心とした島内の経済活性化を図ろうというものです。

昨年９月に行われたモデルツアーの際のワークショップ

そして、上記のモデル調査事業の中心メンバーが、東京都と三宅村の承諾を得た上で、三宅島内の経済団体や島内外の有志と「三宅島人材受け入れ連携協議会」（略称、「人連協」）を立ち上げ、次のような内容の国土交通省「地域における人材の受け入れ体制の整備支援モデル事業」を実施しています。

①住居等人材受け入れ環境の整備に関する調査

②観光客誘致のための専門的人材の受け入れ

③地域資源の生産・加工・流通・販売の活性化

④地震・火山等の自然環境を活かした専門的人材の受け入れ

課題は人材の確保

このモデル事業を実施して行く上で必要となる人材は、新しい発想力や斬新な企画力をもって、島内の人々の思いや努力をつないで、新しい仕組みやネットワークを作り出し、地域活性化につなげていく、コーディネーター的な人材です。

そこで、これから大量に退職する団塊世代の中で、これまでの経験を活かして地域で何か役に立ちたいという人たちに、こうした取り組みについての情報を提供して働きかけていけば、三宅島で必要とされる能力や知識・技能を持った人材を見つけ出すことができるのではないでしょうか。

他方で、自然豊かな三宅島に魅力を感じて「島で暮らしてみたい」や、「何かやりたい」と思っている若い人はたくさんいます。実際に、最近、三宅島に移り住んできた若者もいます。

そこで、住宅や就労の場の確保など、このような若者が島に定住できるような条件を整備することは、島の将来を考えれば必要不可欠となるでしょう。

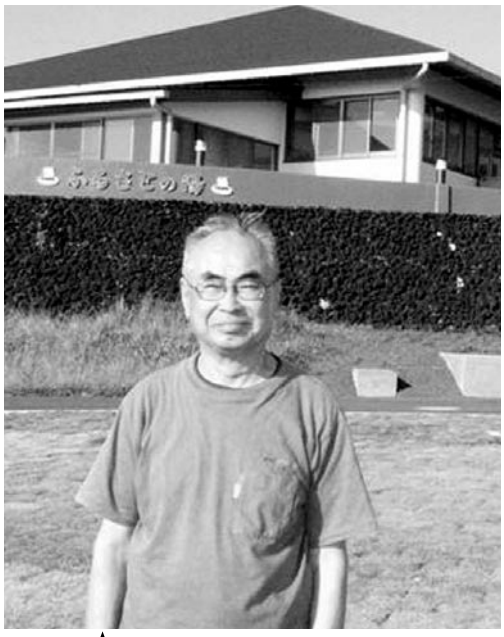
深刻な台風の爪跡

島だよりの発行者村栄（むらさかえ）さんが語る

台風９号は、農作物約3,280万円、ハウスなど施設806万円被害と都・村が集計。村栄さんが、「島の台風」という内容で寄稿してくださった。その中で村さんは、島の環境の厳しさを綴っている。

プロフィール

村栄さんは１９３２年６月７日生まれ。東京学芸大学卒業後、島の小学校、高校で教員をしていた。避難指示解除後は阿古に住み、島だよりを発行。その中で、島びとの暮らしや火山ガスの様子なども伝えている。また、「三宅島　今様流人ぐらし」、「三宅島　噴火避難のいばら道」（文芸社）を出版した。



島だよりの発行を続けている村さん。再開した温泉の前で

農作物に大きな被害

島暮らしでは、年に数回は台風に出遭う。経験から備えはあるが、やはり嫌なものだ。先祖からの言い伝えで、家は軒低く二階は造らない。屋根はトタンぶきだ。その家を建てる場所は、森の陰とか窪地を選ぶ。そして、屋敷全体をツバキなどの防風樹で囲む。海辺だと石垣をめぐらす。畑も同様だ。

ススキ、シノダケで囲む例が多く、一枚の面積を狭くし、分散させて被害軽減を図っている。

これは、島での台風対策一般論であり、激しい風雨には有効だが、雨なし台風だと潮を被って塩害に泣くこともある。

さて、今年の台風９号について書く。この台風は、９月６日夜、島の西の海を北上していった。10年に一度の猛烈な台風だった。屋根が飛ぶなど家屋被害も耳にしている。夏中続いた日照りの後で、農家は雨を欲しがっていただけに２００㎜の降雨予想に喜んだが、結果は強風で畑作はなぎ倒されて全滅。風を恨んで泣いた。特産の赤芽サトイモは茎も折れ飛んで駄目。アシタバも新芽が出るまで出荷は止まった。残されたサツマイモが頑張ったが、葉が痛んで肝心のイモが太るかどうか。離島救荒食のサツマイモも日照りには強いが台風には負ける。

所有地の境界争いにも

他には火山ガスで立ち枯れていた大木が島中で倒れていた。道を塞ぐ倒木は、すぐに片付くが、急を要さぬ倒木は放置されて、やがてシロアリの巣になりそうだ。

島の場合、屋敷、畑の境界木にクワ、エノキ、シイ、タブ、ツバキを目印に植えてあるが、これらも倒れた姿が多く、将来、所有地境界争いの原因になりそうだ。すぐ若木を植えられぬ年寄りや帰島しない留守家庭が多いからだ。

塩風・ガスでも被害

被害はまだまだある。塩害で停電したし、火山ガスの硫黄酸で腐食した道路標識がいたる所で倒れていた。建物、畑作、山林、道路、港湾などの被害はどれほどになるのか。自宅や畑の片付けに追われて分からない。

被害原因の台風９号だが、気象庁発表だと非常に強い雨台風だ。夏の高い海水温で発達しながら、ゆっくり進むため、用心をとのこと。気圧９６５ヘクトパスカル、半径１００㎞の暴風圏で35ｍ／ｓ（秒速）、中心は50ｍ／ｓの暴風。毎時20㎞で北に進んだ。

恐怖を感じた嵐

三宅島は、この中心近くにあって、三宅島測候所の記録では50・７ｍ／ｓの瞬間風速だった。９月６日夜８時過ぎが嵐の最高時で、風はうなり、枯れ枝は飛び、久しぶりの恐怖を味わった。庭で計った降雨量は１６０㎜だった。通行止めもあったし、農家丹精の畑の土は流れただろう。

保存食は島伝承文化

台風置きみやげはまだある。定期船が連日欠航し、唯一の貨客船のため、人も生活物資もストップして島びとを嘆かせた。数日間島の商店の生鮮食品棚は空っぽが続いた。新聞も一週間分どさっと届いて、読む気が失せた。通常でも半日遅れだ。古新聞に払う料金に割引きはない。離島暮らしに慣れた島びとは保存食で耐えている。伝承文化といえる。

台風では泣くことが多いが、それだけ自然に近い日常暮らしでもあるといえる。国立公園の中に住む満足感の裏に、時折自然は牙をむくこともある。よいことばかりなら極楽だ。《07・10・３記》

諦められない帰島

在京のお二人 望郷の思い強く

ふるさとネットのメンバーは、在京島民の訪問活動を行っている。今回紹介する二人の方は、健康上の問題や家が高濃度地区にあるという理由で帰島を果たせない方だ。高齢ということもあり、至急対応をすることが求められる。

透析の機器を島に

Aさん家族と離れて生活

人工透析の機器が島に入らないために帰島できずにいる在京者のAさん。現在、島にいる家族と離れて暮らし、週3回は病院に通っている。

Aさんは、「高齢なので早く帰りたいです。他にも7人ほど機器が入るのを待っています。このように島に住める家があるため、帰島を諦めきれない人も多くいます。糖尿病から透析が必要になる人も多く、今後も増えるはずです。村会議員の方々もこのようなことを理解し努力してもらいたいです」と話した。

人工透析の機器を必要とする方、また必要とする方を知っている方はご連絡ください。

【連絡先TEL・FAX】
事務局　伊藤
03（3963）5697
本部　佐藤
04994（2）1045

在京島民の方が生活する都営住宅の一つ

高濃度地区の人 優先的に

Bさん村営住宅に入れず

高濃度地区に家があるために、島で生活ができないBさん。

村営住宅に入るための抽選に3回応募したがすべて外れてしまい、現在は島と内地での二重生活を送っている。

島の家は今までに何百万もかけて修築していて、このまま避難生活が続けばまた家の修理が必要になってしまう。

本当に島の家に住めない人を優先して村営住宅へ入居させてほしい。

向上高校でシンポジウム

佐藤会長等が参加して

生徒も参加したシンポジウム

9月2日に神奈川県伊勢原市にある向上高等学校の文化祭で、「高校生とボランティア～三宅島から考える～」をテーマにしたシンポジウムが行われた。

ふるさとネットからは、佐藤就之会長と伊藤奈穂子事務局長が参加。会長は、三宅島の現状を説明するとともに、ボランティアに参加することの意義を話した。

編集後記

今回も無事三宅島新報を発行することができました。協力してくださった方々、また読んでくださる皆様に感謝しつつ、毎回編集作業を行っています。これからも三宅島に関する情報を伝えるお手伝いをしていきたいと思いますので、ご協力をよろしくお願いいたします。（DTPA一同）

[お便り]（要約）

来年の春から飛行機が1日1便就航することが決まった内容の村内放送をしておりましたが、少しずつ以前の三宅島に戻りつつあります。帰島できない方々が1日でも早く帰島できますようにお祈り申し上げます。

（坪田 井澤朋子様）

先日は、一緒に訪問活動をさせて頂きありがとうございました。在京島民の方が訪問員の力に励まされ楽しみにしていることがとてもよく分かり素晴らしい活動だと感じております。またご相談の上、勉強会などで何かお手伝いをさせてください。

（埼玉医科大学 久保恭子先生）

[ご寄付者名]

（9月2日～10月15日）

向上高等学校なおき会様、中村徹様、匿名希望S様、井上尚様